

「住みよい」町挾間を考える

—地域づくりと情報化(1)—

別府大学短期大学部 経営情報文化科

梶原 博

I はじめに

町の公式ウェブ・サイト（いわゆるホームページ）作りという形で挾間の情報化事業に関わるようになって3年目になる。当初遠大な計画を夢見ながら、毎月の更新作業もしばしばままならないまま、今年は初心に帰ってサイトの整理を行なうとしていたところ、昨年、町に町民情報室「未来クラブ」が発足した。「情報を通じた町づくりを」という点では同じ思いではあるものの、未来クラブの考えている情報が人と人との直接的なつながりに重きをおいている点で、コンピュータのネットワークに関わっている筆者とは若干立場を異にする。主たる情報交流の場である機関紙「未来クラブ」では、子育てや健康な食生活など、身近な問題に対する有益な情報を提供しており、広報誌からの情報を垂れ流しているだけの現在のウェブは及ぶべきもないが、「家庭においてもパソコンが普及し世界中の情報が手軽に入手できる時代」であるにも関わらず「むしろ生活に密着した身近

な知りたい情報が疎んじられている」と言われてしまうと、少し考えてしまう。

どちらも、図式化すれば「情報化」を通じた「住みよい町づくり」を目指しているのだが、「住みよさ」や「町づくり」に対する考え方の微妙な違いが、「情報」に対しても若干の差異を生み出しているような気がする。未来クラブの活動に触れたのを機会に、改めて「住みよい」「町づくり」とは何かということを考え込んでしまった。

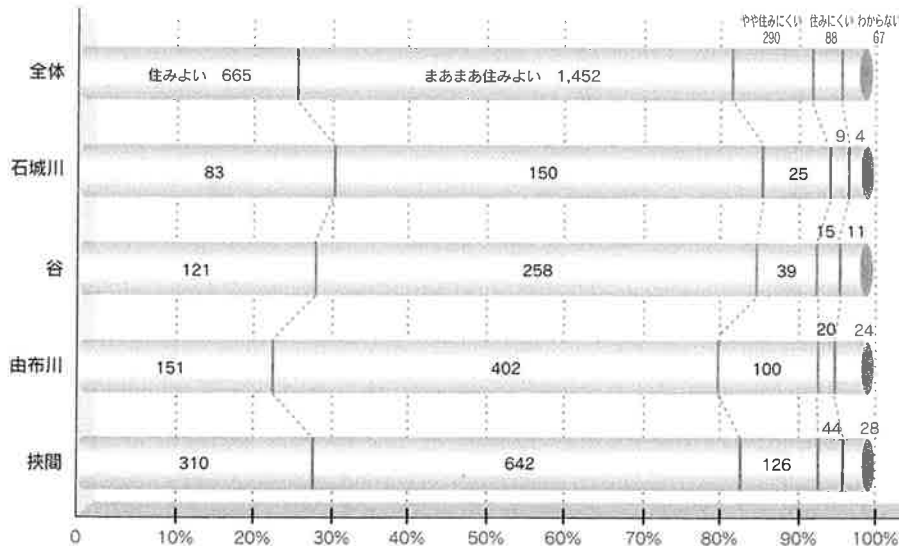
今回まず手始めに、「住みよい」という言葉について、町の中期計画『2010挾間町総合計画』（平成11年）策定の際に行なわれたアンケート調査を手がかりにして考えてみたい。

II 挾間町は「住みよい」町？

挾間町の住民の多くは、自分の町が住みよい町だと考えている（図1）。

アンケートの結果を見てみると、「まあまあ住みよい」を含めて、挾間町全体で83%の住民が挾間町を住みよい町だと答えている。旧経済企画庁

図1 挾間町の「住みよさ」について



が算定した「新国民生活指標（豊かさ指標）」において、他県を圧倒してトップに立っていた富山県では、同じ数字が74%（平成12年、サンプル数514、<http://www.pref.toyama.jp/sections/1015/gal/enq/vol1/index.html>より）であるから、挾間町の数字はなかなかのものである。

もちろん、「豊かさ指標」や、世論調査などのアンケートのあり方そのものが、ずいぶんと怪しい要素で成り立っているわけだし（「豊かさ指標」は平成11年度を最後に、現在は公表もされていない）、物価水準や住宅情勢など「客観的な」数字の良さが、住み良さという「主観的な」ものに直接結びついている保証もない（ちなみに九州における大分県の「豊かさ指標」もダントツの数字であった）。

Ⅲ 自然に基づく「住み良さ」

このように高い挾間の「住み良さ」意識を支えるのは何であろうか。そこで次に、「挾間町の将来像」についてのアンケート結果をみてみたい（図2）。

「生涯福祉の町」（899人）と「自然環境優先の町」（806人）が同程度で並び、3位の「都市化優先の町」（359人）を大きく引き離している（回答総数は2621人）。

住み良さに関するアンケートでは、その理由が質問されてはいなかったが、住民が福祉と自然環境の豊かさを望んでいるということは、そういう

意識が今の「住み良さ」の数字に反映していると言ってよいだろう。ただ、現状を肯定的に見ているかどうかが問題になるが（現状に肯定的だから将来もそれを維持発展してほしいか、あるいは、現状に否定的だから将来は改善して欲しいのか）、挾間町の場合は、自然環境への評価が町の住み良さに結びついていると考えてよいだろう。それは「都市化優先」との対比からも推測できるが（「あなたは都市化を優先しますか」と聞かれて、素直にイエスと答えられる人が、今時どれくらいいるのかという気もするが）、先ほど取り上げた「住み良さ」のアンケート結果の地区別数字にもそれはうかがう事ができる。

挾間町には、石城川・由布川・挾間・谷の4つの地区（旧村。昭和29年に合併）から成り立っているが、地区別に見てみると、由布川地区の満足度が低くて石城川地区の満足度が高い。

由布川地区は、挾間地区に次ぐ人口規模であり、大分医科大学とその周辺の宅地からなる人口増加地域であるのに対して、石城川地区は中山間地帯である挾間の中でも最も山がちで人口の少ない過疎地域である。それにも関わらず、石城川の住民の方が満足度は高い。

こうした結果が出てくる理由はいろいろあるだろうが、同じ人口増加地帯でも、挾間町の中心部である挾間地区では商工業のバランスが比較的取れているのに対して、由布川地区は住宅開発のみが突出しており、これに対する生活インフラが追いついていないせいかもしれない。

図2 挾間町の「将来像」について

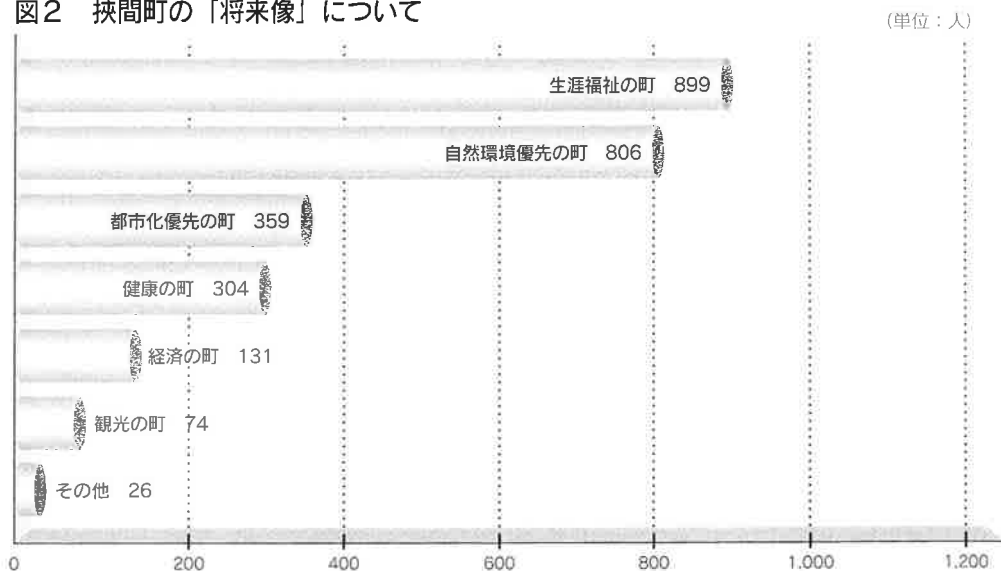
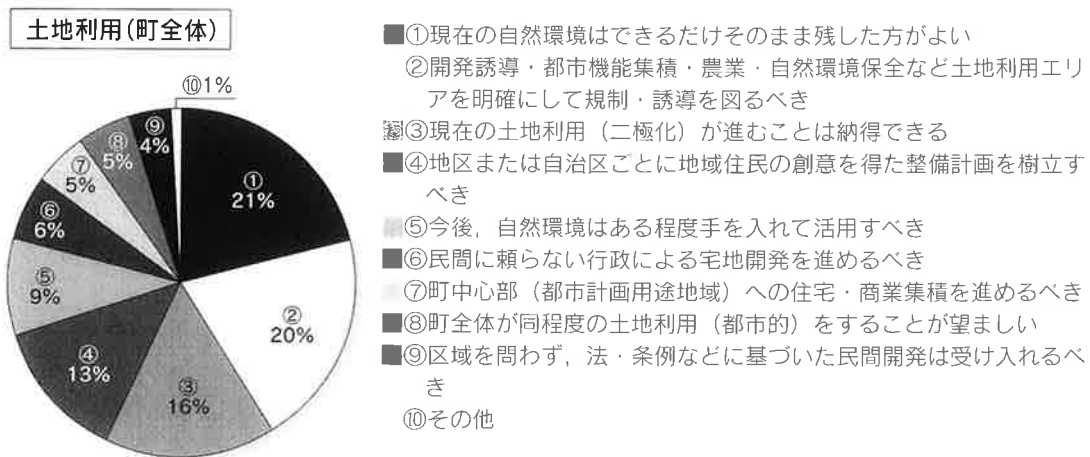


図3 都市と農村の2つの顔を見せる町の今後の土地利用のあり方について



挾間町在住の成人より1,000人を無作為抽出して調査。回答数320人。

人口規模が小さく、従ってサンプル数も少ないから誤差もあるかもしれないが、もう一つの「周辺」地域である谷地区と合わせて考えるならば、自然の豊かな過疎地域ほど、「住みよい」と感じている住人が多いという傾向があると言ってもいいだろう。

また「都市と農村の2つの顔を見せる町の今後の土地利用のあり方について」というアンケート項目でも、最も多かった回答選択肢は「現在の自然環境はできるだけそのまま残した方がよい」で21%に上っている(図3)。こうして様々なデータを見ていくと、現在の自然環境、あるいは豊かな自然が表している何か、が挾間町の住民が感じている住み良さの根底にあると言ってもいいだろう。

Ⅳ 難しい町づくりへのコンセンサス

しかしながら、こうした挾間の住民意識の現状が、実は、町づくりの方向性を複雑なものにしている。

確かに現状の自然環境を維持する声が多いが、それはあくまで「できるだけ」ということであり、何をもってできるだけなのか、どこまで許容すべきなのかまで考えなければ、ほとんど意味はない。

事実、「土地利用」に関するアンケート結果を仔細にみていくなれば、選択肢の分類の仕方では、③⑤⑦⑧⑨は程度の差はあれ「開発是認派」であり、その合計は34%で、積極的な現状維持派の割

合を上回ることになる。

また、これ以外の選択肢である②④⑥は「計画的開発派」とでも言うべきもので39%に上り、「現状維持派」「積極的開発派」「計画的開発派」と大きく3つに分けるならば、「計画的開発派」という、どうとでも捉えられる選択肢が一番多いということになる。

さらに、「これから町づくりに、あなたが最も重点をおいてほしいものは何ですか」という施策要望に関するアンケート(図4)では、「道路の整備」(1207人)が、第2位の「老人・児童・障害者等の福祉対策」(828人)、「自然環境の保全対策」(560人)を抑えて第1位に来る。「老人・児童・障害者等の福祉対策」という項目が実際には幅広い内容をもつことを考えると、個別的な要望としての「道路整備」は他を圧している。

もちろん、自然環境に関する関心が低いわけでは決してない。このアンケートは、あくまで行政の施策に関する要望についてであり、行政の守備範囲を考えての回答である。その意味では、第2位の「下水道対策」などの、社会的インフラ整備に対する要求が多いのは当然とも言えよう。

しかしながら、これら一連のアンケートの結果は、挾間町の住民の迷いを表しているように思えてならない。

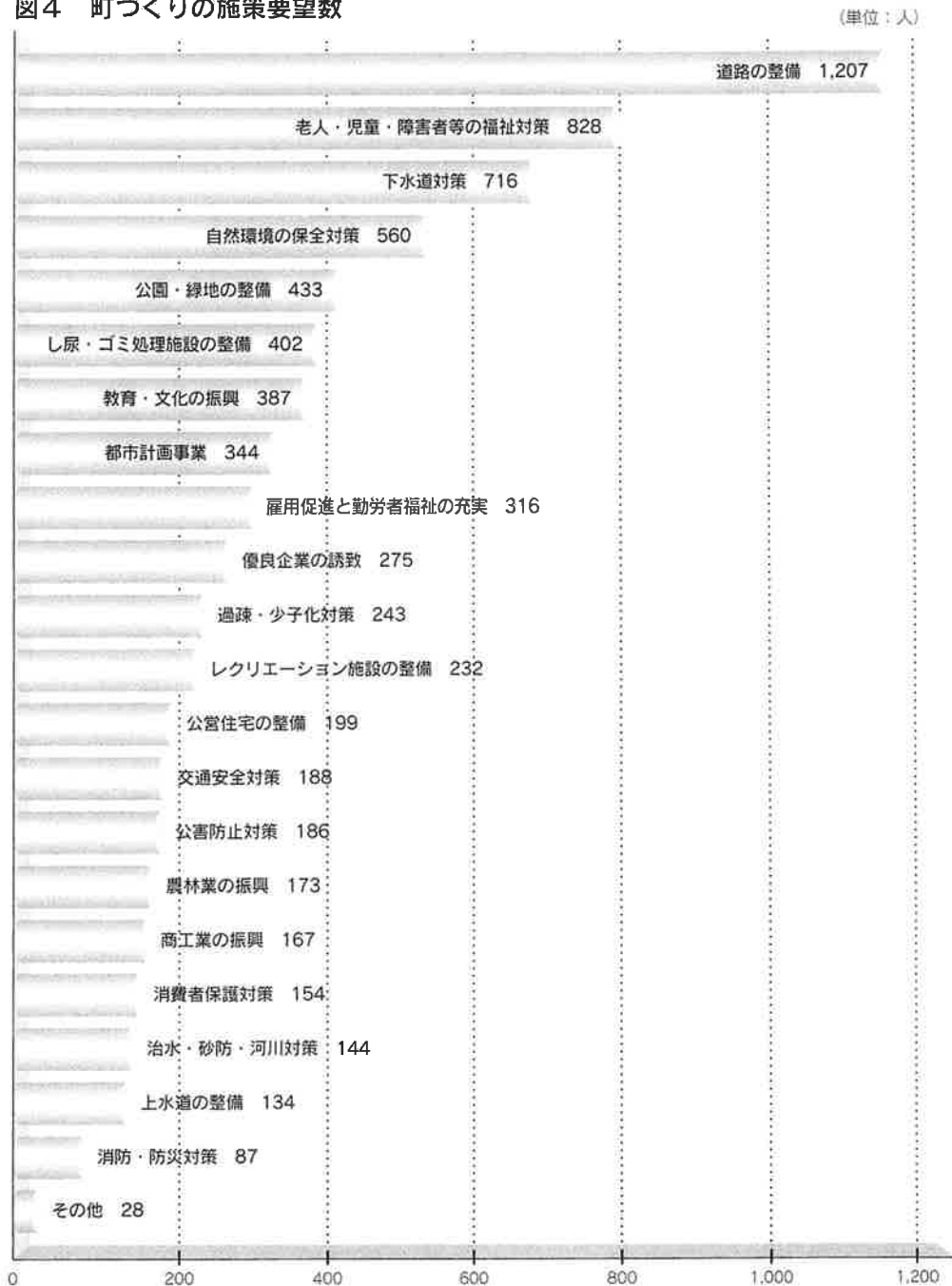
道路の整備は、確実に自然豊かな町の風景を変える。また、道路の拡張は一時的な事業ではなく、長期的に予算を圧迫する。今の時代にあって、道路整備に代表される公共事業中心の、さらに言え

ばハコモノ的な、あるいは都市計画的な行政のあり方は見直しを迫られている。そういう社会の流れの中で、ここ数年一貫して「道路整備」が住民の要望施策第1位であり続けているだけでなく、むしろその数は多くなっている（平成3年の同様のアンケート調査では18%でトップだったのに対し、今回は46%。3肢選択）。あるいは、「町のシンボリックな施設がなく、印象の薄い町である。町の個性・独自性をつくり出すべきである」といったハコモノ的な発想（平成3年のアンケート調査より）でしか町のアイデンティティをイメージで

きない現実がある。福祉のような比較的具体的な「住み良さ」と比べて、自然環境というあいまいな贈り物をどのように扱っていいのかわからない町の姿が読み取れるのではないだろうか。

また、こうした迷いは、単に開発か自然保護かというような単純なものではない。古くからの住民は、自分たちの歴史への思いから、大型郊外店の進出などに現れる風景の変貌に決して肯定的ではない。流入してきた新住民は、挟間の自然や風景を所与のものとして享受しながら、由布川地区のアンケート結果に見られるように、いっそうの

図4 町づくりの施策要望数



インフラ開発を望む。しかも、「これ以上の宅地化はちょっと」という気持ちが見え隠れしている。

しかし、挾間の良さを、漠然と、交通のアクセスとそのままの自然環境だけで考えている限り、町住人の思いとは裏腹にベッドタウン化は漠然と、かつ急速に進み続けるだろう。そのあげく、「住みよい町だが、どんな町だかよく分からない。引っ越してきたころののどかさは今はどこかに消えたし」と嘆く一方、将来の新たな住人達にとっては、挾間町は「単なる大分市のベッドタウン」としてだけ目に映り、取り残された周辺山間部では、ただ道路だけが残りっぱで、町の中心地の精神的なつながりもなくなるというシナリオもあり得るのではない。

V 町づくりへの課題

開発という現実を前提として町の意識が形成されながら、単純に開発を是とすることもできず、それでもずるずると開発されていくという町の現状について、もちろん、行政も住人も気付いている。こうした町の現状への対応は、福祉活動のような、比較的具体的な活動とは異なる対応を求められる。もちろん、福祉活動が老人対策や健康対策のような具体的な対策の単純な集合体だけではないが、開発＝町づくりに関わる主体と、町づくりの結果を受け取る主体との関係が曖昧なだけに、コンセンサスを得るのが難しい。しかも、行政はこの主の問題に主導的に関わる十分な金もないし、それを認める社会情勢でもない。いわゆる住民参加が問題になっているのは、こうした文脈である。

土地利用に関するアンケートでも「地区または自治区ごとに地域住民の創意を得た整備計画を樹立すべき」という意見が13%と少なくないことに注目すべきであるし、また、アンケートの中にこういう選択肢があること自体が時代の流れを表しているともいえる。冒頭に触れた、この文章を書くきっかけともなった町民情報センターも、まさに、住民参加の町づくりを求める声から始まっている。

だが、「住民参加」が形になることが難しいのもまた事実である。「伊達や酔狂」でなくては「住民参加」などできはしない。その点で、これ

まで述べてきたような、「自然環境」への寄りかかり方で、「伊達や酔狂」が出てくるのかどうか。出てくるには、あまりにも、自然環境という贈り物の中に安住しているのではないだろうか。

10年ほど前の世論調査において、日本の国の良いと思うところの第1位が「長い歴史と豊かな自然」であるのにも関わらず、日本人の悪い（劣った）ところの第1位が「自国の歴史や自然を大切にしないこと」であったのには笑えたが、挾間町も同じような状況にあるとも言える。

本稿の冒頭で、町民情報室の話をしたが、ここは、金と場所は（少し）出すけど口は出さない町役場と、行政主導ではなく住民主導の町づくりを考えている有志の、官民双方の思いによって発足した。町では初めての試みであり、最近では有機農産物を中心とするサテライトショップの開店にこぎつけるなど成果も大きいだが、町づくりのための情報交流の場としては、まだまだ模索の段階だと言える。

模索段階であるからいろいろと大変な苦労があるわけだが、その苦労の中心にあるのは、住民の中に「町づくり」の情熱をどのように形成していくかではなかろうか。

「自分の町が好きだ」「この町をもっと良くしたい」という気持ちがなければ町づくりは進まない。そして具体的な生活上の問題意識だけでは、町づくりの情熱というものは生まれないだろう。福祉が充実しているからといって、さらにもっと住みよい町にしていこうと必ずしも思うわけでもないし、「逆に充実していないので改善のためにがんばる」ことが町づくりの情熱かと言われると、それはそれで微妙に違うような気がする。

「住み良い町づくり」や「住み良い町づくりへの情熱」を支えるはずの自分の町への思い（それこそが「住み良さ」の実体だろう）は、居住環境に対する個々の評価の単なる合計ではなく、それらを含む（あるいはまったく含まないかもしれない）もっと範囲の広い何かではないか。そういうものを、我々（地域社会研究センターのメンバー）は「風景」と呼んでいるわけだが、それは「保全」するような性質のものではなく、日々生活の中で作り出していくものである。こうした自然的な「環境」から「風景」へと自覚的に組替えること

が今求められているのではとも思う。

例えば、町民情報室の活動はまだ始まったばかりであり、個々の「住み良さ」の改善を一つ一つ積み重ねていくことに主眼がおかれている。当然、個々の課題にはそれなりの専門家がどこかにいて、課題解決のためにがんばっている集団がいて、それらをネットワークすることで個々の「住み良さ」は増大するだろう。だが、住民が漠然と感じている、望むべき「大きな」町づくりの流れと、それら個々の活動が結びつくには、まだまだ多くのリンクが必要だと思われる。

以下の号では、このリンクのことについて、考えていく予定である。